

【事例12】 Bedford *et al.* / フィジー / カバラ島

1. 調査

対象

フィジー国、カバラ島(1975年居住人口571人)

調査者

R. D. Bedford, R. F. McLean, J. Macpherson, M. Latham, J. Campbell, B. Salvatほか6名(計12名)

調査期間

調査者全員短期調査。上記調査者のうち名を挙げた6名は1975年10月か、1976年3—4月に現地調査を実施。すなわち、Bedfordは20日、McLeanは8日、Macphersonは20日、Campbell(助手)は21日、Salvatは7日、Lathamは4日。

報告

この調査はH. C. Brookfieldを代表者とするUNESCOのMan and Biosphere (MAB)計画によるプロジェクトのひとつで、Rational Use of Island Ecosystemsと言う題の研究(Project 7)の一部をなすものである。研究プロジェクト全体は、フィジー東部の主に小島5つについて扱った。このレビューは、おむね以下のふたつの報告をもとにしている：

Bedford, R. D. & McLean, R. F. with Macpherson, J. 1978. Kabara in the 1970s: home in spite of hazards. In: *The Small Islands and the Reefs* (Island Reports 4, the UNESCO/UNFPA Population and Environment Project in the Eastern Islands of Fiji; Brookfield, H. C. ed.), pp. 9-65. Australian National University, Canberra.

Salvat, B. with Ricard, M., Richard, G., Galzin, R. & Toffart, J. 1978. A summary review of the ecology and reef-lagoon economy of Lau. 同上書, pp. 129-145.

上記ふたつの前駆をなす報告に、次のふたつの予備報告書がある。ただし、上記を読めば、下記のを必ずしも読む必要はない。

Salvat, B. *et al.* 1976. *The Ecology of the Reef-lagoon Complex of Some Islands in the Lau Group: Preliminary Report* (Project Working Paper No. 2, UNESCO/UNFPA Project on Population and Environment in the Eastern Islands of Fiji). Australian National University, Canberra.

Bedford, R. 1976. *Kabara in the 1970s: Dimensions of Dependence in a Contemporary Lauan Society* (Project Working Paper No. 3, 同上プロジェクト). Australian National University, Canberra.

このプロジェクト全体を総括する報告書と論文集は下記のとおりである：

Brookfield, H. C. 1977. *Population, Resources and Development in the Eastern Islands of Fiji: Information for Decision-making* (General Report No. 1 of the UNESCO/UNFPA Population and Environment Project in the Eastern Islands of Fiji). Australian National University, Canberra.

——— ed. 1980. *Population-environment Relations in Tropical Islands: the Case of Eastern Fiji* (MAB Technical Notes 13). UNESCO, Paris.

Latham, M. ed. with Brookfield, H. C. 1983. *The Eastern Islands of Fiji: a Study of the Natural Environment, its Use and Man's Influence on its Evolution* (Travaux et Documents de l'ORSTOM No.162). ORSTOM, Paris.

上記総括報告書と論文集も合わせて読まなければ、完全なレビューはできない。

1980年公刊の論文集、カバラ島調査にふれている分は次の3篇である：

Bedford, R. D. Demographic process in small islands: the case of internal migration. Pp. 29-59.

Latham, M. & Denis, B. The study of land potential: an open-ended inquiry. Pp. 113-123.

McLean, R. F. The land-sea interface of small tropical islands: morphodynamic and man. Pp. 125-130.

さらに、プロジェクト全体をまとめたおそらく最後の成書としては、次のものが公刊されており、カバラ島にもふれている：

Bayliss-Smith, T. P., Bedford, R., Brookfield, H. & Latham, M. with the contributions from Brookfield, M. 1988. *Islands, Islanders and the World: the Colonial and Post-colonial Experience of Eastern Fiji*. Cambridge Human Geography, Cambridge University Press, Cambridge.

2. 対象の概要

地域の概況

カバラ島は、フィジーの主島ヴィティ・レヴ島の東岸から東へ250*_{海里}内外離れた海上に頭を出し、南北方向に点点と連なるラウ諸島中の南部にある島じまのうちの一つで、すぐ近くにはカバラ島よりさらに小さい三島を従がえている。島の形は台湾を南北両方向から力を加えてやや押しつぶしたような格好をしており、面積は53平方*_{海里}で、基本的には隆起サンゴ礁の島であるから、地質学的には、島は大部分石灰岩からなるものの、北西岸付近には標高百数十*_{海里}の火成岩の丘が突き出ている。全体的に島の中央部が低く、海岸に近い縁辺部がやや高いという地形的な特徴がある。海岸からはサンゴ礁が張り出してはいるものの、外洋までの距離は、最も沖合いまで伸びている南南東岸の突出部でさえ1*_{海里}強にすぎない。とくに北北西岸はサンゴ礁の発達が悪い。

気候的には南東貿易風の影響を強く受けており、年によっては降水量ゼロの月もあるはっきりとした乾季が6—8月を中心に認められる。降水量の年変動はかなり顕著で、1965年からの8年間のレンジは、670—2,030*_{mm}であった。このように年降水量が少なく、しかも5月から9月までの乾季が非常にきびしい年がまれでないということを、まず第一に頭に入れておくべきであろう。さらに強烈な熱帯性低気圧の襲来が平均すれば数年に1回の頻度であることもこの島の気候を考える上で重要である。

一般的にこの島の石灰岩上の土壌は、その層がうすく、あまり良好ではない。化学的には有機物含有率は高いものの、交換態カリウムの値の低いのが目立つ。火成岩を母岩とする土壌について言えば、丘の上部は、長年にわたる農地としての利用と強い傾斜のために浸蝕をひどくこうむり、植物栄養成分、とくに可溶性リンとカリウムが乏しい。丘の下部は、カリウム欠乏が明きらかとはいえず有機物含有量も多く、インテンシヴな農業的土地利用に耐えられる。ココヤシ栽培を除く農業的土地利用は、火成岩の丘とその周辺に局限されており、その上部はサツマイモ、下部はキャッサヴァが主作物である。石灰岩地域の大部分は森林がおおっている。ただし、ココナツの生産地区は丘の周辺域のほ

かに十数ヶ所点在しており、とくに北東岸沿いと南岸沿いが帯状に広がるココナッツ主産地である。けれども、ココヤシ栽培面積の総計は島全体の5%未満である。従って、コプラの島外移出量も大したことはない。

サンゴ礁では、部分的に軟体動物が豊富である。外洋からも含めて魚の自給的利用はむしろ低水準であるし、シガテラ毒の問題もある。魚の種類は外洋からのものの方が多い。海産物の島外移出はまったくない。

住民の主食はサツマイモであるが、調査時はキャッサヴァも57%の家で食べていた。この値は他の時期に調査すればもっと高かったであろう。蛋白質は主に生鮮海産物から取る。輸入小麦粉による食品も、86%の家で朝食に出る。それに反して、米は価格が高いせいで一般的ではない。栄養摂取調査の結果、男子成人の1日の平均摂取エネルギーは2,580kcal、蛋白質は60gで、1969年発表のWHO基準値と比較するとエネルギーは不足しているのに反し、蛋白質は超えていた。WHOのカロリー基準値は高すぎるきらいがあるので、カロリーと蛋白質以外の要素を考慮に入れても、概して栄養摂取量は客観的に見て十分に近いと言ってよい。

対象集団の概要

住民はほとんどが本来のフィジー人で、このラウ諸島はメラネシアとポリネシア人の漸移帯に位置する。

フィジー国内の他の島じまとはちがいが、植民地時代初期にも継続的な人口減少期をこのカバラ島は経験しなかったらしい。ただし、1875年にフィジー全体に広まったはしかの流行のために、この島でも若干の人口減少があったようで、1881年の公式センサスによる推計では、居住人口307人であった。その後、第2次世界大戦までの人口増加率は低く、1911年から1936年までの25年間の増加分は、1911年人口の19.6%であった。この数値は、ラウ諸島の島じまの同様な数値の中では最低である。次の30年間の増加分は基準年の76.4%であり、ラウ諸島全体の同様の平均値51.5%を上まわっていた。1950年代なかば以降、人口の島外流出が顕著になったと推測される。その根拠は、公式センサスごとの人口ピラミッドの変化にある。なお、フィジーの1950年代以降調査時までのセン

サス年は、1956と1966年であった。また、1966年の人口が733人であったのが、1975年には既述のように571人へと減少していた。1966年から1975年までの9年間の純流出人口について見ると(9年間に出てまた帰ってきたり、入ってまた出たりした人については、不完全なデータしかとれていない)、1966年に居住していた人の50.3%が1975年には居住していなかったのに対し、1966年には住んでいなかったのに1975年に住んでいた人の数の1975年人口に対する比率は14.5%であった。そして、純流出人口の男女別内わけは、167人对202人であった。つまり男より女の方が多く流出していたのである。さらに、44人からインタビューで得たデータによると、1971年以来1ヶ月以上、しかも2回以上1975年までに島を離れた経験のある人は28人いた。また、家族計画の浸透により出生率が減少したことも、人口ピラミッドの推移から推定できる。

人口流出は、サトウキビのプランテーションがヴィティ・レヴ島に成立して以来であるが、上述のように、今世紀後半に入ってから人口の流出が一層激しく、閉鎖系とは言い難い状況にある。他方、住民の貨幣収入と支出に関する調査結果を見ると、かなりの出超である。この赤字分は、首都スヴァヤヴィティ・レヴ島の他の地区、それにニュージーランドなどからの仕送りで埋めているにちがいない。なお、貨幣支出の大半は食料入手にあてている。

3. 調査項目と方法

人口

居住人口：1975年調査時の数値は多分悉皆調査(ただし、直接の言及はない)。そのように判断する根拠は、1975年の数値が、そうでなければ出てこないであろうと思われる程度に詳細である点にある。そのような基礎調査から1975年の人口ピラミッドを作成している。

出生、死亡率：出生、死亡率に関する数値は示していないので、それらを推定するための基礎調査は実施しなかったのであろう。

移動：人口移動についてはある程度詳細に調査している。先にもふれたように、1996年のセンサス時に居住していた人の名と1975年に10歳以上で、居住してい

た人の名をそれぞれ照合することにより、その9年間のいわば“純”移動を推定している。また抽出調査により、1ヶ月以上島を1971年以降離れたことのある人数と行き先を調べた。さらに、1966年の居住人口がそのまますべて1975年にも居住していたという非現実の仮定から得られる年齢階級並びに性別人口構成と1975年の実際の人口ピラミッドとの比較から、“純”流出人口の年齢階級と性別数も推定している。その他、フィジーにおいて土地所有集団と規定できるマタンガリの構成員調査により、居住人口と、カバラ島に土地所有権を主張できる全人数との比率を推定し、流出人口数のひとつの側面を調査した。補足的な調査としては、1975年に居住していない人の行き先を、それら離島してしまった人の在島近親者からの聞き取り情報(全数調査ではない)で調べた。

食料生産と消費

自給農産物と海産物の生産に関する数量的データは、まったく提示していない。消費量に関しても同様である。しかし、摂取栄養調査は実施しており、エネルギー、蛋白質、ビタミン、カルシウム、鉄分の平均摂取量の数量データはあがっている。

労働能率に関してはまったく言及がない。

島の経済構造

貨幣経済部門については、1970年代前半の数量的データを提示してある。各戸の貨幣収入源となる現地生産物の主なものとしては、コプラと手芸品があげられる。抽出調査による貨幣収入に対する支出の過不足額についての準一次データはまとめてある。ただし、賃金収入と仕送り額のデータはない。

4. 主たる結論

島民の栄養摂取量は、客観的に見て満足すべき水準にある。熱帯性低気圧による甚大な被害とか、コプラ価格の気まぐれな変動にもかかわらず、この島で生まれた原島民の半数が、この島にとどまっている。人口移動は、流出一方ではなく、部分的には還流もある。スヴァヤやニュージーランドの都会から帰ってきた若者の中には、帰島当初こそ島の生業活動や生活習慣にとまどうものの、の

びのびとのんびり暮らせる島の生活の方を時計を頼りに暮らす都会生活よりも選ぶものが少なくない。このような還流により、島に住む人びとは広い世間を見てきた、しかも有益な若い人材を得ているのである。1975年の状況で、島民は将来に対し、概して悲観的ではなかった。

5. コメント

この研究は滞在調査期間の短かさのせいで、数量的データが豊富とはいえない。研究の力点は、島の経済状態と人口移動との関連にある。この島の平均人口密度は、1平方キロあたり10人強と、むしろ低い方に属すると言ってもよいにもかかわらず、主に流出により、人口は停滞ぎみである。平均人口密度が低い理由の大きなもののひとつに、島の面積の大部分をしめる隆起サンゴ礁平野がほとんど不利用地となっているからである。従って、部分的には人口密度のかなり高い地域のある点に注意すべきであろう。確かに住民の見るところでは、非生産的な石灰岩地域の土地を開拓するよりも、相対的にわずかな面積をしめる火成岩地域で、ごく短期の休閑期間でサツマイモかキャッサヴァをつくる方が有利なのであろう。けれども客観的には、石灰岩地域が絶対的に開拓不能とは考えられない。たとえば、もっと人口が激増し、流出先にまったく希望が持てないならば、その開拓を試みたであろうという見解も成り立つのではなかろうか。ところが現実はそのよりも移住したほうが有利であったに違いない。島民は無意識かもしれないが、合理的な判断をくだしてきたといえるであろう。

(中野和敬記)